

6th European Symposium on Thermal Analysis and Calorimetry (ESTAC 6)に出席して

第6回 European Symposium on Thermal Analysis and Calorimetry (ESTAC 6)が、1994年9月11日から16日までの6日間、Veniceから約120km東にあるGradoで開催された。Gradoは日本では、いや恐らくヨーロッパの人々でさえ十分知っているとは思えない小さなリゾート地である。イタリア本土からアドリア海に突き出た長いまっすぐな道路を南下し、旋回橋を渡るとこじんまりとしたファミリーサイズのシーサイドリゾートが眼下に広がるが、そこがGradoである。Gradoは、概してリゾート地が醸し出すゆったりとした雰囲気を持ち、レストラン、カフェ、アイスクリームショップ、シックなブティックなど多種多様な店がすべてホテルから徒歩圏内にある穏やかな土地である。

ESTAC 6はヨーロッパを中心に約40カ国から約450名の参加者を得ていずれのホテルからも徒歩圏内にあるcongress palaceで開催された。日本からの参加者は、日本熱測定学会会長でありICTACの会長でもある小沢丈夫博士(ダイセル化学工業(株))、日本熱測定学会前会長である菅宏教授(元大阪大学、現近畿大学)、ICTAC日本熱測定学会代表評議員である十時稔博士(東レリサーチセンター(株))と私の4人であった。

日曜日の夕刻(19:30) Welcome partyで幕を開き、本会議は翌朝9:00から行われた開会式に引き続き4日間に4つの招待講演と69件の口頭発表、290件のポスター発表が行われた。すでに前号の熱測定(Vol.21, No.4)で紹介されたように、この期間中に菅宏教授と小沢丈夫博士がロシア化学アカデミー・クルナコフ一般および無機化学研究所のLazarev副所長からKurnakov記念賞を手渡された(心よりお祝い申し上げます)。

招待講演者はH. D. Goff (University of Guelph, Canada), E. Gmelin (Max-Planck Institute, Germany), P. Rogl (Wien University, Austria)およびI. Wadsó (Lund University, Sweden)の4人で、いずれも興味深い講演であったが、特に印象に残った講演はGmelin博士の"Calibration of differential scanning calorimeters"であった。熱分析装置が進歩したおかげで測定原理もわからずとも"バカチョン"式にデータが得られるようになった現在、不十分なcalibrationあるいは誤った操作法によりデータが取られる可能性がある。十分なcalibrationや

standard operationの重要性が「取扱説明書の行間を読むべし」と説かれた。現在、本レポートの所属する医薬品の研究領域では国際的に通用するデータのために分析法のvalidation studyがICH(アメリカ、ヨーロッパおよび日本の新医薬品の承認申請に必要な薬事規則の国際的調和を目指した話し合い)の場で論じられているが、熱分析においてもこうした点は重要であると思われるし、それが熱分析の専門家が集まるESTACの会議で講演されることで信頼出来るデータを得ることの重要性を参加者は再認識したことと思われる。

一般講演のなかで特に興味を持った講演は(日本熱測定学会でも同様であるが)複合測定に関するものであった。複合測定に関する演題数は増えてきていると思うし、物理的性質を温度の関数として多面的に研究することがいずれの分野でも必要であると思われる。今回の発表をまとめた特集号がThermochimica Actaより発行されるので、詳細はそれを参照していただきたい。最後に今回のESTAC 6への参加は熱測定の最近の進歩を知ると

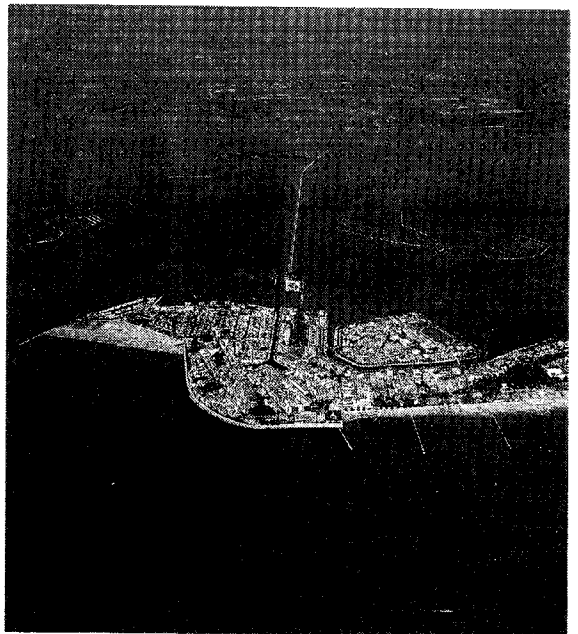


写真1 ESTAC 6が開催されたGrado(手前に突き出た島)



写真2 日本からの参加者4名。会場の前にて

同時に、excursionやbanquetを通じて多くの研究者と知り合える良い機会(日本熱測定討論会では話を聞けない先生方と個別に話もできる)となり、筆者の研究により刺激になったことをお伝えしておく。私のようにまだ駆け出しの研究者にとってもこの会議への参加は意義あるものと思われるので、ESTAC 7(次回の会議は1998年にハンガリーで開催されることになっている)には日本からもっと多くの参加があることを期待したい。

(第一製薬(株)開発研究所 北岡宏章)

レポート

第23回NATASコンファレンス報告

1994年9月25日から28日に、NATAS (North American Thermal Analysis Society)の会議がカナダのトロントで行われた。この学会はその名称からわかる通り、主としてカナダとアメリカの研究者によって構成されており、会議の出席者もこの二ヶ国が大半であった。手元に出席者一覧表がないので出席者の総数、カナダ、アメリカ以外からの出席者数等の正確な数字はわからないが、出席者総数はほぼ熱測定討論会程度、日本からの出席者は報告者を含めて3名であった。会議はシンポジウム1から12に分けられており、各シンポジウムの内容は次の通りであった。

- シンポジウム1 ダイナミックDSCの応用
- シンポジウム2 無機材料
- シンポジウム3 熱硬化性および熱可塑性高分子
- シンポジウム4 エネルギー関連材料の熱解析
- シンポジウム5 生物学および薬学への熱解析の応用
- シンポジウム6 環境学への熱解析の応用
- シンポジウム7 高分子複合材料のキャラクタリゼーションと評価
- シンポジウム8 熱解析の方法
- シンポジウム9 建築および建物材料に関する熱解析
- シンポジウム10 熱解析一般
- シンポジウム11 新しい装置およびソフトウェア
- シンポジウム12 ポスターセッション

上の項目から実用的なテクノロジーに直結したものが多くが見てとれるが、実際参加者、発表者ともに企業の研究者が半数以上であった。このためか日本の熱測定学会とは発表内容の点で少々異なった雰囲気であっ

た。報告者は名古屋大学の八田教授と同じく、ダイナミックDSCのシンポジウムで発表を行ったが、このシンポジウムは新しい測定法ということで関心が高く、ほぼ一日を要し会場も満席であった。今回の会議で最も参加者の多いシンポジウムであったと思われる。

今回の会議は表題の通り第23回であったが、NATASとしては設立25年でひとつの節目にあたっていた。トロントは第一回のNATAS会議が行われた場所であり、設立25年を記念して再びトロント開催となったとのことである。しかし近年はNATASも益々盛んとばかりは言えないらしく、banquetで行われた25年を振り返っての講演では、これを機に新たなブレイクスルーをとの呼びかけがなされていた。

会場、宿泊は街の中心にある大きなホテルであり、便利かつ快適であった。いくつかの発表の入れ替え等があったが、学会の運営はスムーズに行われた。ひとつ不便を感じたのは、プログラムの目次に発表者の所属が書かれていないことであった。予稿は長短様々であり、このあたりはお国柄というところであろう。お国柄といえ、banquetの後にicecream and danceなる集まりがあり、これには驚いた。カナダ・アメリカ流の山盛りアイスクリームと大音響のディスコ調ダンスのパーティなのである。日本なら夏期講習会の懇親会で、かき氷に盆踊りというところかもしれない。

報告者の怠慢で写真を全く撮らなかったため、文章のみの報告となってしまったことをお詫びします。

(京都工芸繊維大学繊維学部 猿山靖夫)